

「今日の診断指針」 第2版

亀山 正邦・亀田 治男 総編集
高久 史磨・阿部 令彦

東京大学教授

尾 形 悦 郎

診断学の教科書あるいは鑑別診断のための成書として、欧米からも本邦からも多くの名著が世に出されてきた。しかし、実際には内科診断学の入門書を例外として、これらが十分に利用されてきたとは思えない。診断のためのアプローチがレントゲン写真、CT、エコー、更にはMRIなどのイメージ診断の分野で発展し、また中央検査室業務を中心とした検査室検査による診断の分野で発展するなど、細分化されるにつれ、それぞれの分野の成書は読むことはあっても、診断のための一般書を手にする機会はほとんどなくなってしまった。

一方で、近年では内科教科書の多くがproblem solvingということを意識して編纂され、必然的に鑑別診断に必要とする情報が一般内科書から得られるようになり、この傾向にいつその拍車がかけられた。

しかし一般内科書から得られる情報は現場から一歩退いて考察されたものであり、実際には実地臨床の場で即座に診断の助けとなるガイドとしての役割を果たす書物が依然として必要であることは言うまでもない。更に最近、欧米では診断基準が次々と改められている。事情はわが国でも同様で厚生省の各種研究班あるいは各種学会の研究班などにより、わが国独自の診断基準も次々と設けられ、この情報は欧米文献からは決して入手できない。up-to-dateのわが国独自の診断のためのガイドブックも強く求められる。

「今日の診断指針」はこれらの要求に応えたもので、私が久しく待ち望んでいた、診療の座右にあって大いに助けとなる極めて親切なガイドブックである。おそらく私と同じ考えと思われる編集者の意図が十分徹底したこともあって、特に第2版と

版を重ねるに及び、私の希望にますますフィットしたものとなった。この書を利用して感じることは、常に現場を意識し、そこでの問題を解決するためのアプローチという線ですべてが貫かれているという点である。その問題の頻度が意識され、必要な対策が適時時間を軸として書かれており、また診断のアプローチは総合的である。

一方、それとは別に画像診断などは別個の項目として説明されている部分もあり、利用者の便宜を図っている。更に各項目とも、急ぎのときのメモ代わりに各セクションの重要な事項にキーワードとしてアンダーラインが引かれており、これを拾うことにより重大な見落としが防げ、また記憶に便利なようにできている。巻末の正常値表、特に機能検査値の項目がもう少し拡充し、引きやすくなることが望まれることと、少々誤字があることが気にはなったが、さすがに全体として第1版と比べると大きな進歩のあとがみられる。

以上から本書を実地医家の座右の書として高く評価し、強く推薦する次第である。

B5判 1,836頁 1988年 定価
19,000円(送料600円) 医学書院刊